

ようこそ 大学美術館へ

大学美術館とはどのような施設か
まだ知られていないその概要と魅力を
歴史と沿革から今後の課題まで紹介する。

薩摩雅登 さつま・まさと / 大学美術館・助教授)



02 理想と現実

大学美術館は実技系国立大学内に設置される美術館という特色を最大限に活かし、学内共同利用施設としての教育研究機関として設立された。理想を高々に謳えば、「日本近現代美術と東京芸術大学の歴史を反映する所蔵作品と、学内の制作現場で日々生産される同時代美術を両軸として、伝統と現代を複合的に交錯させ、新たな価値を創造し、あわせて、大学から社会への情報発信の場となる」ことを基本理念としている。要するに芸大美術館は、所蔵作品を調査研究、保存修復、展示公開、情報公開すること学内の創作活動と社会を直結させることを活動の基本方針とする学術的・実験的な美術館として設立された。

しかしその一方で、東京の上野に新たな国立美術館ができれば、世間一般からはいわゆる特別企画展、それも大規模な展覧会を期待される。大学美術館としても、開館した以上は美術館の存在を周知させなければならないし、また、生まれたばかりのひよこのような美術館を世界的水準にするためには海外の一流美術館との交流は不可欠である。このような諸事情から、開館から三五年間ほどは活動の重心を企画展に置いて、地力を養うことを目的としている。大学美術館で、コレクションの展示・情報公開と学術的・実験的な小規模企画展が活動の中心となり、それに大規模な国際展などがバランスよく開催されるには今しばらく時間が必要と思われる。

01 歴史と沿革

本学における芸術資料の収集は、東京音楽学校・東京美術学校開校以前の音楽取調掛・図画取調掛の時代にすでに始まっていた。それから一世紀以上を経た今日、東京芸術大学は、国宝級の古美術、近代の絵画・彫刻・工芸品、明治時代の楽器、建築・デザイン図面など、多種多様な約四万五〇〇〇点の芸術資料を所蔵している。これらは、当初は文庫と呼ばれていた図書館に、一九六五（昭和四十）年からは新たに竣工した芸術資料館に収蔵されて、学内の教育研究資料として有効に活用されていたが、展示スペースが狭隘なために一般に広く公開される機会が少なかった。

あるいは死蔵されている学術資料は社会全体で有効に活用するべきとして、ユニヴァーシティ・ミュージアム構想が提唱された。それに加えて、芸術資料館の貧弱な収蔵設備が貴重な芸術資料の保存には不適として問題となるにいたって、本学も美術館を具体的に構想し、一九九五（平成七）年二月に「東京芸術大学美術館基本構想 上野校地の将来像を求めて」を完成させた。この基本構想をもとに計画は順調に進み、同年秋に美術館設立が決定、一九九六年九月に建築着工、一九九八年四月に芸術資料館組織を大学美術館組織に拡大改組、一九九九年五月に建築が竣工し、同年十月に大学美術館が開館した。



03 建築の特色

美術館建築は基本理念を踏まえて設計され、学内の約一七〇〇㎡の敷地に地上四階・地下四階、延床面積約八七〇〇㎡の建築が完成した。特色としては、

実験的な小規模・中規模展を前提として明確に機能区分した四つの展示室を持つ（総計約一四〇〇㎡）。展示室1は展示ケース付きの標準的な展示室。展示室2はスポットライトのみの調光システムによる劇場的空間。展示室3は外光を導入できるホワイトキューブの空間。展示室4は暗転あるいは照度制限を前提とした小規模空間。

総計約一六〇〇㎡の四つの収蔵庫を持ち、展示面積よりも収蔵面積が大きい。

美術館の主役は作家でも館員でもなく作品と観客という理念から、一階に観客のエントランスと作品搬入口を配した。このため展示室が地下階と三階に分かれて、全展示室を使用する大きな展覧会には不都合もあるが、そのような企画展・特別展は基本構想では想定していないのでやむをえない。

わが国の美術館は外見やエントランスホールなどが立派で、バックヤードが脆弱な傾向にあるという反省から、収蔵庫前室、特別収蔵庫、資料調査室、X線撮影室、作業員控室などを充実させた。

このように、表面的な見栄えよりも教育研究機関としての実質を優先させた建築だが、実技系大学内の美術館にふさわしく随所に素材にこだわり、例えば、収蔵庫扉の漆仕上げなどは館員のひそやかな楽しみとなっている。



04 取手における展開

大学美術館の取手館は一九九四年秋に竣工・

に貢献した。

開館した（当時は芸術資料館取手館）。その頃の取手校地は、大多数の一年生、一部の大学院生、一部の非常勤教官、数名の常勤教官が展開していた草創期で、取手館の完成は校地全体に大きな意味を持つものであった。取手館多目的ホールを会場に、ほとんど教官や学生の手弁当で開催された「卒業制作展 美術学校時代の油彩画」、取手校地非常勤教官展「地の力」、檀倉康二遺作展、「東京芸術大学日本画教官展」との現場から、などの内容は、一般美術館の小規模あるいは中規模企画展と比較しても遜色のないものであった。しかも入場無料ということもあって、開催者の情熱が取手市民にも伝わり、ボランティアの清掃や受付が登場するなど、結果的に大学と市民の交流を深めること

に貢献した。取手館多目的ホールは、先端芸術表現学科が設置されてからは一時的にその校舎となり、さらに今年からは音楽環境創造学科のピアノ練習室のほか、一部は体育授業などにも使用されている。これほど多目的に有効に利用される美術館は全国でも珍しい。

取手館は実は延床面積約六〇〇〇㎡の美術館として設計されており、現在は収蔵庫、多目的ホール、事務室など、約半分の施設のみが竣工した未完成の状態にある。残りの約三〇〇〇㎡に研究室、展示室、図書室などが整備されて、美術館としての体制が整備されて初めて、取手に自立した美術と音楽の二学科との連携、市民との交流など、大学美術館取手館としての本格的な機能を発揮するのである。

取手館は実は延床面積約六〇〇〇㎡の美術館として設計されており、現在は収蔵庫、多目的ホール、事務室など、約半分の施設のみが竣工した未完成の状態にある。残りの約三〇〇〇㎡に研究室、展示室、図書室などが整備されて、美術館としての体制が整備されて初めて、取手に自立した美術と音楽の二学科との連携、市民との交流など、大学美術館取手館としての本格的な機能を発揮するのである。

05 今後の課題と可能性

美術館と名乗ってはいるが、大学美術館のコレクションには、大学という名にふさわしく、絵画、彫刻、工芸などの美術品ばかりでなく、考古学資料、古楽器などの音楽資料、建築模型、建築・デザイン図面など、多種多様な資料が含まれている。しかし、収蔵庫や展示室の設備は美術品の収蔵と展示を目的に作られており、楽器の試演、建築模型の閲覧、図面の閲覧などを求められても、施設的にも組織的にも対応できないのが現状である。また、資料の保存は行え

ても、修復や修理を行うには設備が根本的に不足している。基本構想にしたがって、第二美術館（M2）、第三美術館（M3）の計画をすすめるならば、図書館（ビブリオテック）とも美術館（ミュージアム）とも性格の異なる、多彩な資料を保管、修復、閲覧（試演）、貸出しができる、資料収集館（アルキーフ）的な機能を兼ね備えるように、施設および組織を検討する必要がある。

基本構想にしたがって、第二美術館（M2）、第三美術館（M3）の計画をすすめるならば、図書館（ビブリオテック）とも美術館（ミュージアム）とも性格の異なる、多彩な資料を保管、修復、閲覧（試演）、貸出しができる、資料収集館（アルキーフ）的な機能を兼ね備えるように、施設および組織を検討する必要がある。

日本画

彫刻

たけのうちきゅういち
竹内久一 (1857 - 1916)
「神武天皇立像」
1890年 (明治23)
木 総高297.3cm 像高236.0cm

竹内久一は江戸に生まれ象牙彫刻を学んだが、奈良に滞在し木彫の研究をしている時にフェノロサや岡倉天心と知り合い、東京美術学校彫刻科初代教授として招聘された。この作品では、見事な檜を使用し、彩色の痕が認められないことから、作者が材質と自らの技法に全てをかけたことがうかがわれる。日本の木彫の伝統を継承する堂々たる立像で、第3回内国勧業博覧会にも出品されているが、戦後は時代の風潮に合わず長く忘れられていた。



大学美術館名品 コレクション10選

前身である資料館時代より受け継いできた
大学美術館の個性的なコレクションの中から
ジャンルごとに紹介する誌上ギャラリー。

「金錯狩獵文銅筒」

漢時代 1 - 2世紀
銅 上径3.55 下径3.5 長25.6cm
重要文化財

銅鑄製の中空の金具で、馬車の傘の柄の一部とみられる。筒全体を帯で4段に分割し、山並みや渦巻状の雲気文、多数の禽獣や人物が流麗な金線で表されている。なかでも虎に矢を放つ騎馬人物や鳳凰の文様が華麗である。文様の金象嵌には、中国産とされる純度の高い金が埋め込まれている。朝鮮半島・楽浪（現在のピョンヤン）の出土と伝えられ、1965年中国河北省定州市から出土した金具やMIHO MUSEUM所蔵の金銀象嵌円筒形馬車金具との文様・形状の酷似が指摘されている。

「板絵著色天部像（醍醐寺）」

平安時代 951年 (天曆5)
板絵着彩 各79.9 × 21.5cm
重要文化財

この板絵は、醍醐寺五重塔の8面連子窓の羽目板のうち、西側北面の一部である。そこには胎蔵界外金剛部院西方諸尊の10尊が描かれていたが、そのうちの2枚4尊分が本学の所蔵となった。上段に水天と毘紐天妃を、下段には鼓天と樂天を配している。創建当初のまま補修を受けておらず、剥落も激しいが、下書き線や地塗りが見え出し、作画過程を知る良い資料となっている。唐風から和風へと移り変わる平安中期の基準作例としても貴重である。



古美術



よこやまたいかん
横山大観 (1868 - 1958)

「村童観猿翁」

1893年 (明治26)
絹本着彩 110.5 × 180.5cm

東京美術学校日本画科第1期生横山大観の卒業制作。花鳥風月、歴史、仏教説話などに題材を求めた作品が多い当時において軽妙洒脱な作品といえる。この画題について大観は『大観画談』に、「あの作品に描いた猿回しの翁は、橋本 (雅邦) 先生に見立て、村童11人は、(日本画科) 同期の11人の幼な顔を想像して描いたものです」と記している。



はしもと が ほう
橋本雅邦 (1835 - 1908)

「白雲紅樹」

1890年 (明治23)
紙本着彩・掛幅装 265.8cm × 159.3cm
重要文化財

第3回内国勸業博覧会出品作品。画面下半分に見られる正統水墨画のような厳格な画面構成と、上半分の色彩配色の妙による空間表現が対比されている。作者の力点は題名からして言うまでもなく上半分で、白雲の上部には金泥で金雲を描き、緑樹の下には金粉をまくなど、新しい空間表現を目指して細かな創意工夫を凝らしている。雅邦は岡倉天心に共鳴して日本画の革新を試みていた。

ラゲーズ、ヴィンチェンツォ

(1841 - 1927)

「日本婦人」

1880年 (明治13)
ブロンズ 高62.1cm
石膏原型 (重要文化財) より鋳造

1875年、ラゲーズは日本政府からイタリア政府に委嘱された彫刻教師選抜試験に合格、翌年来日し工部美術学校の彫刻科を担当する。それまで日本に造形美術としての彫刻という概念はなく、ラゲーズの写実的作風が日本の洋風彫刻の出発点となる。本作品は滞日中に制作されたもので、若い婦人のやわらかな雰囲気を出した佳作である。明治14年の第2回内国勸業博覧会に出品、象牙彫刻が主流だったなか、新しい素材と写実性が大いに注目を浴びた。



工芸



「錦魚手板」



「児犬手板」



「雀手板」



「魚狗手板」



「秋草手板」



「牡丹手板」

うんのしょうみん
海野勝珉

(号 芳洲・東華齋 1844 - 1915)

「彫金手板」

1912年(明治45)

9.0/9.1 × 12.1 × 12.3cm

東京美術学校で伝統彫金技法を実習するために使用していた教材。手板と称する。金、銀、赤銅、真鍮など様々な金属を用いて、毛彫、線象嵌、平象嵌、高肉厚、薄肉打出しなど、多彩な技法を盛り込んで、順序よく学べる内容となっている。今日では、明治彫金界を代表する作者の晩年の円熟した技が凝縮された貴重な資料で、大学美術館ならではの所蔵品といえる。



まつだ じんろく
松田権六 (1896-1986)

「草花鳥獸文小手箱」

1919年(大正8)

金沃懸地 蒔絵 平文 蓋裏平目地 身及び側面 潤塗 螺鈿

15.8 × 23.5 × 21.0cm

手箱の内側に大きく口をあけて吼える獅子が描かれており、その咆哮に驚いて逃げ惑う鳥獣が表一面に描かれている。作者は、漆の上に純金と青金の粉を表面全体に蒔き、漆の乾かないうちに一気に動物の輪郭を針金で作った筆で引っかけて描きあげるとい技法で、躍動する動物を描き出した。100点満点で評価された卒業制作で、作者の代表作のひとつ。

やまもと ほうすい
山本芳翠 (1850 - 1906)

「西洋婦人像」

1882年 (明治15)

油彩・板 41.0×32.9cm

小振りな板に若い西洋婦人が横向きのポーズで描かれている。フランスの文豪テオフィル・ゴーティエの娘、ジュディットの肖像といわれる。画面はなめらかで平滑な下地づくりから周到に準備され、側面の輪郭の美しさがひきたつように陰影が計算されている。1878年、芳翠は本格的な西洋画技法を学ぶため、フランスのパリ国立美術学校に留学した。本作は輸送船の事故で失った滞在作のうち、運よく残された数少ない作品のひとつである。



西洋画



はらだ なおじろう
原田直次郎 (1863 - 1899)

「靴屋の親爺」

1886年 (明治19)

油彩・カンヴァス 60.3×46.5cm

重要文化財

靴職人のその性格まで浮き彫りにしたような迫真の肖像画である。ドイツ・ミュンヘンに留学した直次郎の滞欧作であり、彼の代表作ともなっている。陰影の対比が油画特有の巧みな技術を生かして描かれており、平筆を使ったなげない筆の運びや的確に対象を捉える表現力には、特に卓越したものが感じられる。明治洋画を代表する肖像画としての評価も高く、近年、重要文化財の指定を受けた。